

学会ハイライト

第32回日本皮膚外科学会総会・学術集会 を終えて

(平成29年7月22日(土)、23日(日)・大宮ソニックシティにて)

中村 泰大

埼玉医科大学国際医療センター皮膚腫瘍科・皮膚科准教授

はじめに

2017年7月22～23日の2日間にわたり、さいたま市の大宮ソニックシティにて、第32回日本皮膚外科学会総会・学術集会を開催させていただきました。本学会は、「皮膚腫瘍、母斑、瘢痕その他皮膚科の知識をもって治療にあたるべき疾患に関する臨床力の向上」を目的として、1986年に発足した「皮膚外科勉強会」がその端緒であります。1996年に「日本皮膚外科学会」として成立し、2014年3月には特定非営利活動法人の認証を得て、今日に至っています。このたびの第32回大会は天候にも恵まれ、会期中に250名以上の先生方、関係者に全

国よりご参加いただき、盛会裡に終了することができました。ご講演の先生方、座長の先生方、当日運営を担当いただいた虎の門病院OBの皆様を含めた、ご参加のすべての方々からのご協力に厚く御礼申し上げます。また、本学術集会の準備・運営にあたり、筑波大学皮膚科同門会、埼玉県皮膚科医会、埼玉県皮膚科治療学会、第31回日本皮膚外科学会総会・学術集会事務局、有志の先生方、および協賛各企業からお志をいただきましたこと、心より感謝申し上げます(図1)。

本学術大会のテーマ

例年皮膚外科領域に関するテーマを決定し、それに関する演題を募集してセッションを設けています。本学術大会では“低侵襲手術への更なる挑戦”といたしました。近年の手術デバイスの進歩・発展に伴い、あらゆる外科領域で手術の低侵襲化は格段の進歩を遂げています。皮膚外科領域も例外ではなく、日常診療で気づく低侵襲手術へのさまざまなアイデアや



図1 学会運営スタッフ。

図2 特別講演. 鈴木真実先生によるイラスト作成技法の説明.



工夫をご発表いただき、参加者で議論・共有することを狙いました。

特別講演

毎年、皮膚外科領域に限らず多方面の分野から講師を招聘し、ご講演いただいております。今回は、医療系雑誌の分野で主にご活躍されているイラストレーターの鈴木真実先生にご講演いただきました(図2)。イラストや絵本のページ1枚を描くにも、技法の詳細から、目的に応じた効果的な構図の設定、仕事を請負うに当たっての心構えなど、そのプロフェッショナルなお仕事ぶりの講演内容に、聴衆の方々は深く魅了されました。なかでも驚いたのは、薄い絵本一冊を完成させるのにも、候補となる絵を約1000枚描くそうで、われわれのみえないところでプロとして膨大な仕事をこなしていることに深い感銘を受けました。また、「イラストや絵をみてくれる方一人ひとりの顔はみえないけれども、みえない向こうの誰かが喜んでくれることがとても励みになる」とのご講演終了時の結びの一言は、われわれ医療人の喜びの原点でもあり、医師になったときの初心を聴衆皆に思いおこさせてくれました。

ご講演後の10分間の休憩時間中に、書籍販売でご用意させていただいていた鈴木先生の2種類の絵本は飛ぶように売れ、何とその場で鈴木先生の即席のサイン会となってしまいました。絵本購入者がサインをもらうべく行列ができるほどであり、これはまさに鈴木先生のご講演の素晴らしさを反



図3 ランチョンセミナー講演後の質疑に答える各務 博先生.

映した出来事かと思います。これまで幾多の学術集会に参加してきた私も初めてみる光景でした。

スポンサードセミナー

ランチョンセミナーを2つ用意いたしました。いずれも進行期メラノーマに対する免疫チェックポイント阻害薬に関するセミナーですが、本邦ではメスを握る皮膚外科医が皮膚悪性腫瘍患者の全経過を通じて携わるという特性があります。免疫チェックポイント阻害薬につき、外科治療と薬物療法を適切に使い分ける正しい知識が皮膚外科医には必要となります。

今回は基礎的な側面から、肺癌領域における免疫学の権威である各務博先生(埼玉医科大学国際医療センター呼吸器内科教授)に内科医の視点から、癌免疫の基礎と免疫チェックポイント阻害薬のメカニズムに加え、現在世界的に脚光を浴びている各務先生の研究成果の一端である、抗PD-1抗体効果のバイオマーカーなどにつきご講演いただきました(図3)。皮膚外科医にとってもたいへん興味深い講演で、皮膚科領域に应用が可能な内容も多く、聴衆より多くの質疑応答があり、丁寧に1つひとつの質疑にお答えくださいました。

もう1つの講演は、皮膚癌領域からの臨床的な視点で、竹之内辰也先生(新潟県立がんセンター新潟病院副院長)にご講演いただきました。近年の免疫チェックポイント阻害薬の臨床試験成績や

図4 英語シンポジウム
(International Symposium)
でのパネルディスカッションの
1コマ。



術後アジュバント療法，つい先日に表示されたセンチネルリンパ節生検陽性例の早期郭清の意義を問うMSLT-II trialの結果を含めながら，独自の視点で，今後のメラノーマ診療につき高察をいただきました。われわれ皮膚外科医にとって「有益で適切なメスの使い方」は今後どのような動向となるのか深く考えさせられる内容でした。

2つの免疫チェックポイント阻害薬についての講演でしたが，切り口のまったく異なる講演を両先生にご用意いただきましたおかげで，多くの参加者に好評なセミナーとなりました。

シンポジウムと一般演題

「皮膚外科の国際化」をテーマに英語でのシンポジウムを企画いたしました。世界各地へのご留学，技術指導のご経験を持つ5名のシンポジストの先生方に「海外の皮膚外科の状況」について英語でご講演いただきました。ヨーロッパの現状については，スイス，ドイツに臨床留学された松下茂人先生（鹿児島医療センター皮膚腫瘍科・皮膚科科長），寺本由紀子先生（埼玉医科大学国際医療センター皮膚腫瘍科・皮膚科講師）に，アメリカについては古川洋志先生（北海道大学形成外科准教授）に，オーストラリアについては堤田新先生（国立がん研究センター皮膚腫瘍科医長）に担当していただきました。アジアについては，インドネシアを主軸にアジア各国で現地技術指導を行っている大原國章先生（元 虎の門病院皮膚科副院長）にその現状をご講演いただきました。また海外からの招聘者として，台湾より張英睿先生（Taipei Institute of Dermatology）にご参加いただき，台湾の皮膚外科



図5 懇親会の様子。本学会はノーネクタイでの参加が伝統として引き継がれている。

医養成システムにつき解説していただきました。どのシンポジストも堪能な英語で，各国の現状と本邦との具体的相違について，わかりやすく講演していただきました（図4）。聴衆の先生方に，世界的にも水準の高い本邦の皮膚外科の立ち位置を認識していただけたと同時に，今後避けられない国際交流や国際発信について，強く意識していただけたのではないかと思います。学会の歴史において初の英語シンポジウムということもあり，終了後に参加者より「刺激となり，英語のモチベーションが沸いた」との感想もいただきました。

一般演題はテーマ演題10演題を含め，口演とポスターを合わせて合計68演題をいただきました。さまざまな皮膚外科手技に関する研究および症例報告が主体です。今回初めて参加する参加者からは，「こんなに熱心な議論をする学会は初めて」といわれるほど，熱気ある活発な討論が繰り広げられました。

例年聴衆1人ひとりが口演発表を採点し、もっとも点数が高かった前年度の演題を「日本皮膚外科学会元氣賞」として表彰しています。今年は鹿兒山浩先生(新潟県立がんセンター新潟病院)が発表された「足底悪性黒色腫の再建—どれが最良か?—」が元氣賞を受賞されました。

おわりに

日本皮膚外科学会総会・学術集会は、“全員参加型の単一会場での開催”と“熱い質疑応答”の伝統が脈々と引き継がれています。近年の会員数・演題応募数増加に伴い、単一会場開催に限界が来ているのも否めませんが、各評議員のアンケートでも、単一会場でのスタイルを保持すべきとの意見が大半でした。今回ご参加いただいた非会員の先生からも、「とても活気のある学会で、単一会場

の学会は今となっては希有の存在なので是非堅持して欲しい」とのありがたいご意見もいただきました。“全員に聞いてもらえる”からこそ、ご発表の先生は真剣に発表内容を準備し、聴衆も熱い質疑応答でこれに答える、という学会の本来あるべき良き姿を保持することで、活気のある学術集会として続いてきたのだと思います。一方で、東アジア各国による国際学会(East Asia Dermatologic Surgery Symposium)が、4年後に日本で開催予定であり、本学会も協力団体として開催を強くサポートする立場となります。本学会も今後来る国際化に向けて、大きな転換期に差ししかかっており、これまで受け継がれてきた学会の良き伝統と、新たな国際化の波を巧みに融合して、今後さらなる発展を遂げることを切に願っております(図5)。